

われら 沢登り 探検隊

[子どもゆめ基金 20 周年記念事業]

令和 3 年 9 月 23 日 (木) 秋分の日

【担当：小野 栄策】



(1) 事業の背景

新型コロナウイルス感染症の感染拡大の影響により自然体験や体験活動等の機会が減少しており、本施設においても、昨年度から宿泊利用団体のキャンセルや教育事業の規模縮小・中止などが相次ぎ、年度当初に計画していた体験活動の実施が困難な状況でした。

そこで、コロナ禍においても、子供たちの体験活動の機会を安全安心に提供するために、当初の看板プログラムである沢活動を、感染防止対策を講じながら実施することとしました。

(2) 事業の趣旨

小学校 5・6 年生の子供たちが、自然体験活動（沢登り）等を通して、自然体験への関心を高めるとともに、友達と協力することの大切さに気付く。

(3) 目標

- ① 積極的に友達と関わり、協力して活動することができる。
- ② 自然の大切さや、自然の中で体を動かす楽しさを知る。
- ③ 自分の周りにいる人や物、自然に対して、感謝や思いやりを持った行動ができる。

(4) 対象

小学校 5 年生・6 年生 30 人

(5) 事業の実施

① 参加者

15 名 (男子 9 名、女子 6 名)

	男子	女子	合計
小学 5 年	9	0	9
小学 6 年	0	6	6
合計	9	6	15

② 日程

時間	内容
9:00	受付
9:30	始まりの会 仲良くなるゲーム
10:30	沢登り 準備
11:00	沢へ
12:00	昼食 (キャンプ村)
13:00	沢登り (深海川コース)
16:00	自然の家へ
16:30	振り返り 終わりの会
17:00	自然の家解散

③ 活動の様子

【仲良くなるゲーム】



【仲良くなるゲーム】

受付、始まりの会が終わり、緊張感が漂う雰囲気を和ませるために、仲良くなるゲームを行いました。顔も名前も知らない子供たち同士が、気軽に話せるように、じゃんけんゲームや、円になって自己紹介ゲームを行いました。

個人個人の名前を覚えたところで、集団でのゲームを行いました。事前に性別や年齢、参加経験をもとに班を構成し、子供たち同士の間隔を空けるなどの感染症予防対策を施しながらゲームを進めました。同じ動きをする、並び替える、自分の思いを伝える、助け合うなど、参加者同士の関りを重視した活動を仕組むことで、一つの課題をみんなで解決しようとする姿が見られました。ゲーム進行のスタッフが沢登りにつながるような活動の意味付け、価値付けを行い、「みんなで助け合いながら沢のゴールを目指そう」という意識が高まりました。



【沢登り安全指導】



【沢登り安全指導】

沢登りは危険度の高い活動です。転倒や滑落によるけが、熱中症や低体温症による体調不良、危険な動植物など、参加者が注意しなければならない内容が多いため、その一つ一つを具体的にイメージできるように挿絵を用いながら説明を行いました。

また、寒さやけが対策はもちろん、水難事故にあわないようにヘルメットやライフジャケットを装着し、その役割を理解させながら安全管理に努めました。

さらに、今回の目標でもある「協力」を意識づけるために、班やバディで行う安全対策や沢での手助けの仕方などを考えました。また、活動中もコースの途中で立ち止まりながら、岩場の状況に合わせた安全指導を行いました。子供たち同士の声掛けや相手を思いやる行動が随所に見られました。



【沢登り】



【沢登り】

本所にある3つの沢コースの中で、最も難易度の高い「深海川コース」にチャレンジしました。このコースは、水深が深く、子供たちの行く手を遮るように巨岩が立ちはだかり、速い水流でなかなか一人では進めないコースです。集中力を失うと岩から足を踏み外したり、滑りやすい苔で転倒したりする危険もあります。

より安全性を確保するために、2つのグループに分け、スタッフをそれぞれに配置し、コース取りの選択やその場にあった登り方、困った友達への対処方法などを考えさせながら、時間をかけて進みました。午前中の仲良くなるゲームの効果もあり、「大丈夫」の声掛けや、登ることに苦勞する子供たちへの働きかけなど、友達を一人にしない行動が随所に見られました。

日頃できない非日常体験に満足していました。

【振り返り】



【振り返り】

活動の振り返りは、まず一人一人が今回の沢登り体験で感じたことを個人やグループでまとめ、全員が円になって発表しました。参加者が少人数だったこともあり、しっかりと時間をかけて行うことで、参加者一人一人が真剣に思いを伝え、事業を締めくくることができました。子供たちの発表では、「協力」「挑戦」「安心」などの言葉が数多く聞かれ、友達の思いやりのありがたさを強く感じていました。

(6) 評価

① アンケート結果（キャンプ全体に対する満足度）

満足	やや満足	やや不満	不満
100%	0%	0%	0%

② 参加者の声

- ・コロナ禍の中、知らない人とコミュニケーションをとって、協力してたくさんの活動をして、思い出をつくることができました。もっとこの場を利用してたくさんの友達をつくりたいと思いました。
- ・登れない岩があったら、友達が上から手を出してくれて岩を登れたので、うれしかったです。自然の家のスタッフもやさしくしゃべりやすかったからよかったです。また違うキャンプに参加したいです。
- ・自分がやったことないことばかりで、挑戦しようと思う気持ちがわいてきました。
- ・みんな一致団結して行動できました。
- ・沢登りは、一人ではなく二人や三人で協力しないといけないことが分かった。
- ・スリル満点でした。本当に探検隊みたいで、また来たいと思いました。
- ・まず、ゲームをしました。その活動がなかったら沢登り中に協力することができない

と思いました。協力を意識できたので、ゲームがあっただけよかったと思いました。

- ・みんなで助け合って仲が深められました。自然と触れ合うことができたのでよかったです。

(7) 成果と課題

① 成果

- ・参加者の満足度は高く、事業の目標である「協力すること」「友達を思いやること」「自然を満喫すること」なども高い評価でした。
- ・子供たちの意識が連続して発展するように、プログラムの組み方を工夫しました。仲間づくりゲームから沢登り体験へとつなげる展開は、子供たちが協力することを体験から学び、沢登りの場面で自然と力を合わせることができるなど効果的でした。
- ・コロナ禍の中、感染症対策として今回は特に三密を避けた仲間づくりゲームや話し合い活動に留意して行いました。

② 課題

- ・今回は、仲間づくりゲームを室内で行いましたが、屋外で行うなど、時と場所、内容を工夫し、沢登りにつながる活動プログラムをさらに充実させていく必要があります。
- ・沢登りは季節限定の体験活動であるので、沢登りを行えない時期にも同様の活動を実施できるよう開発した「岩場登り」においても、仲間づくりとのパッケージングが有効であるか検証する必要があります。

③ 今後の展望

現在、多くの利用団体が行っている沢活動の流れは、自然の家職員が安全指導を行い、団体が安全具を装着し、各沢コースまで歩いて行きます。一通り沢登りを行った後は、本館まで戻ってきて着替えを行い、帰路に就くというパターンが一般です。少し時間に余裕のある団体は、仲間づくりゲームを行い、友達同士が「協力すること」「助け合うこと」など、体験を通してイメージを持たせて、沢登りへと発展していきます。より多くの団体が、沢登りを集団づくりに意識して取り組むためにも、この仲間づくりゲームを移動中の適切な場所で行ったり、沢登りで「協力すること」を疑似体験できるプログラムを開発したり必ず振り返りを位置づけたりして、プログラムを工夫していきたいと考えております。

また、沢登り活動で、どんなプログラムを提供すれば仲間づくりプログラムに発展するか、職員の考える場が必要です。そこで、沢登りを行っている近隣社会教育施設にも声をかけ、沢登りに精通した講師を招き、研修会を開く中で、沢の中でも場所に応じた(水の深い場所、岩場、滑りやすい場所、水生生物の存在、流れがある場所等)、プログラムを提供していきたいです。

さらに、今年度新規コースとして開発をめざしていた沢登りロングコースの設置をめざしていきます。このコースでの沢のバリエーションは豊富で、様々なアクティビティが開発されると考えます。練習コース、本番コースの運営など、当面は、教育事業での活用をめざして可能性を広めていきたいと考えています。